

四恩

四恩

ある時、世尊は王舎城耆闍崛山の中に住し、大比丘衆、菩薩衆、諸天善人等無量の大衆の為に法をお説きになった。その時、王舎大城に五百の長者があつたが、世尊は五首長者の問いに対して「報恩」を説かれた。これ即ち、「心地観経、報恩品第二」である。

経に言く

「諦に聴け。諦に聴け。善く之を思念せよ。……世、出世の恩に四種有り、一には父母の恩、二には衆生の恩、三には国王の恩、四には三宝の恩なり。是の如きの四恩、一切衆生平等に荷負せり。」

「人身受け難し、今己に受く、佛法聞き難し、今己に聞く。」

永劫から久遠へ、はてしなき時の間を五十年の寿を頂き、今日まで生き永らえて、しかも如来聖人の真実教を聞き、念仏申す身に養育せられ、多くの念仏の善友を恵まれて、生きさせて頂く身の幸福が、骨髓に徹する時、今更に「慶大難思の慶心」と仰せられた聖人の御信境を拝すると共に、湧き出づるものは、報じても報じつくせぬ御恩である。ここに於て、私は報恩について世尊の教を頂く。

父母の恩

「善男子、父母の恩とは、父に慈恩有り、母に悲恩あり。」

念仏して年とるまゝに、身にしむものは父母の恩である。父母生育の為に人と成ることが出来たのである。そして大法に値うことが出来たのである。

「母の悲恩とは、若し我世に任すること一劫中にして説くとも尽くすこと能わず。我今汝が為に少分を宣説せん。たとひ人あつて福德の為の故に、一百の浄行の大婆羅門、一百の五通の諸の大所仙、一百の善友を恭敬供養し、七宝上妙の堂内に安置し、百千種の上妙の珍膳を以て、諸の瓔珞を垂れ、衆宝の衣服、栴檀沈香。諸の房舎を立て、百宝莊嚴の床臥敷具、衆病を療治するに百種の湯薬をもつてし、一心に供養し百千劫を満たすも、一念孝順心に任し、微少物を以て悲母を色養し、随所に供侍するに如かず。前の功德に此せんに、有千万分にして校量す可からず。」

孝養の徳、思うべし。孝は易行道にして、不孝は難行道である。微少の物を以て母に供養するも百千万の功德にまさると説かれるのである。

「世間悲母の子を念ふこと比なく、恩は未形に及ぶ。即ち始め受胎してより十月を終るまで行住坐臥に苦悩を受くること口に述べらる所に非ず。……憂念の心恒に休息なく、但自ら將に生産せんと欲するを思惟しては、漸く諸苦を受けて昼夜愁悩するなり。若し産の難き時は、百千の刃競ひ来つて屠割するが如く、あるいは無常に致る。若し苦悩無ければ諸の親眷族喜樂して盡きず、猶し貧女の如意珠を得るが如し。其の子聲を發すれば音楽を聞くが如し。母の胸臆を以て寝處と為す。左右の膝上は常に遊履するところと為り、胸臆中に於て甘露の泉を出す、長養之恩は普天に弥く、憐愍之徳は廣大にして比無し。世間に高しとする所山岳に過ぎるはな

し、悲母の恩は須弥に逾ゆ。世間之重きは大地を先と為す。悲母の恩は亦彼に過ぎたり……母に十徳あり、一には大地と名く。母胎中に於て所依と為るが故に。二には能生と名く。衆苦を経歴して能く生ずるが故に。三には、能正と名く。恒に母手を以て五根を理すが故に。四には養育と名く。四時宜しきに随つて能く長養するが故に。五には智者と名く。能く方便を以つて智慧を生ずるが故に。六には莊嚴と名く、妙瓔珞を以て嚴飾するが故に。七には安穩と名く。母の懷抱を以て止息と為すが故に。八には教授と名く、善巧方便して子を導引するが故に。九には教戒と名く。善き言辞を以て衆惡を離れしむるが故に。十には興業と名く。能く家業を以て子に付嘱するが故に。」

母の徳思うべし。七日にして御生母と別れ給いし大聖猶かくの如く説きたまう。仏は成道の後、自ら切利天に昇りて三月、母の為に大法を説き、母をして正道に帰せしめ、無生忍を悟らしめてその広恩を報じたもうた。人の子考うべし。憶うべし。世骨續いて説きたもうて言く、

「善男子、諸の世間に於て何者か最も富み、何者か最も貧しき。悲母堂に在す之を名けて富とまりと為す。悲母在さざる之を名けて貧と為す。悲母在す時を名けて日中と為し、悲母死せし時を名けて日没と為す。悲母在す時を名けて月明と為し、悲母亡き時を名けて闇夜と為す。是の故に汝等、勤加し修習して父母に孝養すべし。若し人佛を供すると福等しくして異なること無し。是の如く父母の恩を報ずべし。」と。幾度も熟読すべし。仏は、孝養の徳を以て仏を供養するの徳と等しいと説かれる。

衆生の恩

「善男子、衆生恩とは、即ち無始より来、一切衆生五道に輪転して百千劫を経たり。多生中に於て互に父母と為れり。互に父母と為るを以ての故に、一切の男子は即ち走れ慈父なり。一切の女人は即ち是れ悲母なり。昔、生生中大恩有るが故に、猶現在の父母之恩の如く等しくして差別なし。是の如きの昔恩猶未だ報ぜず、或は妄業に因つて諸の違順を生ず、執着を以ての故に反つて其の怨と為る。……是の因縁を以て諸の衆生の類、一切時に於て亦大恩有り、実に報ずること難しと為す」と。

念仏して、ほのかに衆生の大恩を知る。聖人亦「一切衆生はみなもて世々生々の父母兄弟なり。」と仰せられ、念仏報恩を説きたまう。社会の恩、衆生の恩なければ、一食一衣すらないことである。涯しなき衆生海に合掌せずしてよからうか。

国王の恩

「国王の恩とは、国王は福德最も勝れ、人間に生ると雖も自在を得たるが故に、三十三天諸の天子等、恒にその力を與へて常に護持するが故に。その國界山河大地に於て大海際を盡して國王に属し、一人の福德一切衆生の福に勝過するが故に。是の大聖王は正法を以て化し、能く衆生をして悉く皆安樂ならしむ。譬へば世間一切の殿堂は柱を根本と為すが如く、人民の豊榮は王を根本と為し、王の有するに依るが故に。亦梵王の能く万物を生ずるが如く、聖王能く治國の法を生じ衆生を利するが故に。日天子の能く世間を照すが如く、聖王亦能く天下の人の安樂を觀察するが故

に。王正治を失はゞ人の所依なし、饒若し正化を以てすれば八大恐怖その國に入らず。……譬へば長者に唯一子あり、愛念比なく憐愍益常に安樂を與へて晝夜捨てざるが如く、國の大聖王も亦復かくの如し。群生を等示すること同一子の如し、擁護之心晝夜捨つる無し。是の如き人王十善を修せしむるを福德主と名く……一切聖王の法皆是の如し。是の如き聖主を正法王と名く。是の因縁を以て十徳を成就す。一には能照と名く、智慧眼を以て世間を照すが故に。二には莊嚴と名く、大福智を以て國を莊嚴するが故に。三には興業と名く、大安樂を以て人民に與ふるが故に。四には杖怨と名く、一切の怨敵自然に伏するが故に。五には離怖と名く、能く八難をしりぞげ恐怖を離れしむるが故に。六には任賢と名く、諸の賢人を集め、國事を評するが故に。七には法本と名く、萬姓の安住するは國王に依るが故に。八には持世と名く、天王の法を以て世間を持するが故に。九には業主と名く、善惡の諸業國王に属するが故に。十に人主と名く、一切人民王を主と為すが故に。一切國王先世の福を以て是の如き十種の勝徳を成就す。……以下略」

世尊の言は、畏くも我が聖天子の御徳の廣大無辺を説かれたものではないか。我らは今更の如く、日本国民としてこの有難き国土に生を享け、陛下の御稜威のもとに安住を得させて頂き、大乘相應の地として、聖徳太子、親鸞聖人等のみ教を頂くことが出来たことを限りなく有難く思わざるを得ない。唵。愚悪微粒大の草莽そうぼうの臣、しかもこの国土の一隅を汚し奉つて、この鴻恩に浴す。何によつてかこの廣大の恩徳に報ぜん。されど祖師は、念仏を以て、鎮護国家の大法となし給ふ。我をしていよいよ大法によつて内に充滿せしめられ、懺悔合掌して国土の底に埋めしめ給へ。これ我が唯一の願である。

三宝の恩

「善男子、三寶の恩とは、不思議に名く、衆生を利樂して休息あることなし。是の諸仏の身は真善無漏なり。無数の大劫因を修して証する所なり。三有の業果永く盡きて余すなし。功德の寶山巍々として比無し……福德甚深なること大海のごとし。智慧無碍なること虚空に等し……光明遍く十方三世を照し、一切衆生は煩惱業障ずば都て覚知せず、苦海に沈倫して生死窮りなし、三寶出世して大船師と作り、能く愛流を裁り、彼岸に超昇せしむ。……この経、三寶を説くこと広博詳細を極むれども紙数の都合によつて略す。

「篤く三宝を敬え」とは、聖徳太子の御遺訓であつた。一切衆生をして、生死の牢獄を出でしめるも三宝であり、痴闇の衆生を照す光も三宝であり、貧乏の衆生の為に、摩尼珠の衆宝を雨らすのも亦これである。人生に、眞実の道を開いて、和を成就し、安穩を成就するもこれであり、一切衆生をして、ついに大菩提を得しめ涅槃の証を得しむるもの実に三宝の恩徳である。我らは、如来本願の救いによつて、ほのかに信心の智慧光によつて、今更の如く廣大なる、父母の御恩、衆生の御恩、大君の御恩、三宝の御恩の尊さに感泣するものでみる、上も御恩なり、下も御恩なり、外も御恩、内も御恩、聞くも見るも、全て御恩、御恩の中に呼吸するもの即ち我である。合掌